特別指定研究

トユク出土『勝鬘義記』について

――トルファン、敦煌そして飛鳥――

西域研究会
研究員　橘堂晃一

一、はじめに

『勝鬘経』（『勝鬘師子吼一乗大方便方広経』求那跋陀羅訳）は、説法する主体が勝鬘夫人という女性の在家信者である点、また如来蔵思想を鼓吹する点でよく知られている。南北朝時代には盛んに講ぜられたようで、当時の『勝鬘経』講説者の様々な主張は、吉蔵の『勝鬘寶窟』に看取できる。さらに敦煌写本の中には古逸未伝の注釈書の写本が数多く含まれていた。いま藤枝晃氏の研究に従えば、十一点、七種類の未伝注釈書を確認することができる。(1) 例えば、照法師の「勝鬘経疏」（S五二四）、延昌四年(2)に高昌客道人得受が供養したことを記した「勝鬘義記」（S二六六〇）などがよく知られていよう。筆者が新たに確認しえたところでは、P三四二六が、浄影寺慧遠の『勝鬘義記』巻上に該当することを指摘しておきたい。(3)

さらに敦煌写本中より聖徳太子の撰述とされる『勝鬘経義疏』と酷似した内容を持つ写本が見いだされたことは、我が国の、とりわけ仏教界に大きな波紋を投げかけた。現在、中国国家図書館に保管される写本「ＢＤ一一一四」（旧番号では「奈九三」）がそれである。

波紋の一つに、「本義」の問題がある。『勝鬘経義疏』では、聖徳太子が依拠された注釈書を「本義云」として「奈九三」と一致する文章が引用される部分が十四箇所みえる。(4) その類似性から「奈九三」が、『勝鬘経義疏』の「本義」とされる注釈書ではないかと考えられたのである。藤枝晃氏が「奈九三」を「勝鬘経義疏本義」と命名する理由もここにある。ただし古泉圓順氏は、「奈九三」のテキストを初めて公にした研究にお

いて、これが直接の本義であるとは見なせないと、既に表明されており、[5] 藤枝氏も「奈九三」は「本義」の節略本あるいは改修本の一つであり、両書の共通の祖本は別にあるとしている。[6] これに対して専家によって両書の対校と研究がなされ、当初は「奈九三」を「本義」とするのに躊躇する向きもあったが、次第に「本義」説を積極的に指示する研究者も現れるようになった。金治勇氏もその一人である。[7] 氏は更に「奈九三」の撰述者を成論師・僧旻とする説を打ち出している。[8] 今のところ祖本たる「本義」の写本は発見されていないので、藤枝氏の仮説は立証不可能であった。ところが、大谷探検隊将来資料の中に、この問題に関連する新たな資料がみつかった。

本稿では、「奈九三」（以下、敦煌本とする）及び『勝鬘経義疏』（以下、太子本とする）の内容に類似する「勝鬘義記」を紹介し、新たな問題を提起したいと考えている。

二、資料の所在

本稿で扱う「勝鬘義記」とは、大谷探検隊がトユク（吐峪溝）で発掘した小さな写経断片である。わずか十二行、百文字程度を残す断片の写真は、『西域考古図譜』下巻に掲載されている。[9] 経巻の巻尾部分を残すこの断片には、尾題「勝鬘義記巻中」と書写年代を示す奥書「延昌廿八年」とが記されている。「延昌廿八年」は五八七年、即ち麹氏高昌国の麹乾固の時代に独自に用いられた元号である。出土地のトユクとは、トルファンの高昌故城より15㎞東にある石窟寺院を指す。麹氏高昌国時代の漢文資料では丁谷寺がこれに比定されている。[10] この資料のように麹氏高昌国時代の年代が明記された仏典は、トルファン地域から出土した資料中それほど多くは見られない。それだけに史料的価値も高いのだが、残念なことに現物の行方は不明である。ところが幸いなことに、旅順博物館に保管されている大谷探検隊将来資料中に、これと同じ写本の一部と思われる断片十八点が発見されたのである。

これは旅順博物館と龍谷大学との共同研究「中国旅順博物館所蔵新疆出土文物に関する総合的研究」で得られた成果の一つである。[11] 筆者は、大連で開催されたシンポジウムにおいて「麹氏高昌国時代の仏典注釈書」と題して、これらについて報告した。またこの時の発表内容は、『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典研究論文集』（旅順博物館、龍谷大学共編、二〇〇六年）に収められている。いまその要点を言えば、

①『勝鬘経』「一乗章」部分の注釈である。ただし巻中の末尾は「一乗章」の途中で分断されている。

②敦煌本とほぼ同じ内容である。また太子本との対応も見られる。

③金治氏が敦煌本の選者を成実論師・僧旻と考えた根拠となる「四種生死」説とそれを補強する文言を含んでいる。

こういった分析に基づき、主として敦煌本との対応順に断片の録文を提示し、復元を試みたのである。ただし、紙数の関係上、具体的に敦煌本や太子本の対応箇所を示すことはできなかった。そこで本稿では、敦煌本との対応を示すことに重点を置き、またその後に判明した事柄なども紹介したいと考えている。なお、太子本については、すでに先学による敦煌本とのすぐれた比較研究があるので[12]、本稿では必要に応じて提示することとする。

三、トユク出土「勝鬘義記」と敦煌写本「勝鬘経疏」（奈九三）との比較

以下、まず旅順博物館の「勝鬘義記」（以下、トユク本とする）の録文を提示し、次に敦煌本との対応を示したい。敦煌本のテキストは、『聖徳太子集』所収のものに依拠する。なお18断片の写真は既に図録で公表しているので[13]、あらためて掲載することはしない。ただし【資料5】LM20_1465_07_03は、図録『旅順博物館蔵　トルファン出土漢文仏典断片選影』（以下、選影とする）七五頁では誤った写真が掲載されており、『研究論文集』所収の拙稿では、不鮮明ではあるが、その断片が貼り付けられているページの写真を掲載しておいた。図録編集に携わった一人としてお詫びするとともに、あらためて正しい写真をここに提示する次第である（図1）。

凡例

一、〔　〕は欠損部分を示す。ただし欠損部分を大正蔵やその他の関連資料により補足えきる場合にも〔　〕で括った。

二、［　］は、欠損しているが文字の残画が確認できる部分を示す。ただし、残画により判読可能な場合にはこれを示し、同様に［　］で括った。

【資料1】LM20_1452_39_09（選影七五頁）

1 「　　」「
2 思議。上来分段生死。亦有[念]「念生滅
3 「　」[□従顯□□名故□]「

敦煌本（三一四～三二〇行）

第一。直擧二種生死。以釋於前。何以故有二種生死。此七字是也。二種生死者。一者分段生死。二者不思議變易生死。分段有二種。一者色身分段。謂形質国土也。二者寿命分段。謂修短期限也。三界果報。皆名分段也。八地已上。身无形色。命无期限。但以明代闇。以新易故。刹那改變。故名變易。非下地所測。稱不思議也。分段生死。亦念念生滅。而不名變易者。以身命一報。有定期限。分段麤顯。故從為名也。

【資料2】LM20_1465_06_03＋LM20_1465_07_01（選影七五頁）

1 [□□□□□□□□□□]「
2 物為因。何物為緣。解言。皆有因緣。分[段]「
3 [□□□分段生死。變]易生死。以无漏[為因]「
4 「□□□□□□□」[漏]善為因。三界餘習為「
5 「□□□□□□」[形色同][於分段]「
6 [不名變変易者。]緣非正緣。[不名分段□]「
……紙縫……
7 生死。四者初流来時生死。以前心為因。虚「
8 [□]「　」[八地。]變易生。但闇[□]「
9 「　」[□]途。始是分段。自[前]「

敦煌本（三二〇～三三二行）

變易生死。於八地九地。亦有刼数期限。但期限約他。故不從為名。前念是因。後念是果。新新改變。變易義彰。故從為名也。今判生死。應有四種。一者分段生死。以有漏業為因。四住地煩悩為縁。二者不思議變易生死。以无漏業為因。无明住地煩悩為縁。二者不思議變易生死。以有漏勝善為因。三界餘習為縁。初流来時。无餘此習。无此生死。反流之日。断正使結。方起習業。潤勝善業。至於七地。方用受生也。二國中間。猶有形色。寿命期限。有同分段。念念生滅。有同變易。但非正結所感。故不稱分段。既有形色。不名變易。故曰二國中間也。四者初流来時生死。初流来時。在三界外。无无漏業。不即受八地。變易生死。但以闇惑相傳。故受生死。流入三界。但起取相。取相相傳。乃至極重。以極重取相。受三途生。始是分段生也。此前盡是。

【資料3】LM20_1465_06_02＋LM20_1465_08_02（選影七五頁）

1 四諦。初流来時。在三界外。[從]識窟中出〔
2 脩滅道。接将成仏。亦有滅道。四種生死[有]〔
3 〕樂求涅槃。返流之日。方〔
4 〕[死。]有十四諦。若[相]〔
5 〕[形色]〔
6 竟義。但明二種生死。唯除分段。所以非竟〔
7 [段擧始變易擧終]中間可知。不尓所以明[初]〔
8 〕[遣]二國中間。縁非正結。亦[□]〔

敦煌本（三三二～三四三行）

流来生死。流来生死。无有形色。寿命期限。以新易故。与變易同。但不以无漏為因。唯闇闇相続。念念下墜。所以別立。為一種生死也。約分段生死。及變易生死。故有八諦。約二国中間。又有四諦。初流来時。亦應有四諦。合十六諦也。以有人言。初流来時。未入三途。於其中間。有修道即仏。應有滅道。故有十六諦也。今釋不然。初流来時。必生三途。然後厭苦集。求涅槃。反流之日。方修滅道。初流来時。唯有苦集。无有滅道。四種生死。有十四諦也。苦相収攝。二國中間。属於分段。初流来時。属於變易。勝鬘今日。為釋究竟。故明二死。但除分段。則不究竟。兼除變易。則為究竟。分段擧始。變易擧終。則中間可知。初流来時。未明断決。无以證仏究竟。所以不説。又二國中間。縁非正使。初流来時。无无漏業。故略不説。

『勝鬘経』の本文では分段生死と変易生死の二種類の生死を説くのに対し、資料1～3は、それに二国中間の生死と初流来の生死を加え、いわゆる四種生死があると説く段である。分段とは六地以前が、変易は八地以上が受ける生死であり、その間にある七地を二国中間生死とし、さらにそのいずれにも当てはまらない生死界に初めて流来する段階を初流来生死とする説である。金治氏の研究で明らかにされたように、四種生死説を自家の得意としていたのは、いわゆる南朝の成論師である。すなわち、吉蔵の『勝鬘宝窟』に、

有人云く、四種生死有り。一には流来生死。初め空に託して一念の識を起こすを謂う。二には分段。三には中間生死、二乗の無学なり。四には変易なり。七地は所受の余習を因となして三界に生ぜざれども、未だ法流に至らず。故に中間生死は二乗の無学なり。三界の報尽きて同じく中間に生じ、法華等の経を聞きて転じて菩薩となる。習行満じて七地の終心に於て八地の法流に入るを乃ち変易と名づく。故に六地を以て分段、七地は中間を受け、八地は変易を受く。（大正蔵四七巻、四七b）

とあることや、さらに同じく吉蔵の『大乗玄論』に

成論師云く。四種生死有り。流来生死、分段生死、八地已上変易生死、七地中間生死なり。（大正蔵四五巻、四七b）

とあることに依っている。

成論師とは、吉蔵が江南の学僧のなかでも特に三大法師を指していう呼称である。即ち梁の法雲（四六七～五二九年）、僧旻（四六七～五二二

年）そして智蔵（四五八～五二二年）である。彼らはそれぞれ法華、勝鬘、涅槃に通暁していたと伝えられる一方、成実論にも明るかった。「成論師」とか「成実師」と呼ばれる所以である。金治氏は、四種生死説を唱えたのが、成論師の中でも僧旻のみであることを一つの理由として、僧旻が敦煌本の撰述者であると主張した。(14)

いま我々の資料をみると、敦煌本はもちろん、太子本ともよく対応している。その一方で両疏にはみえない説もある。例えば、資料3の一行目に「初流来時。在三界外。従識窟中出」とある。「在三界外」が、意味は異なるものの「未入三途」に対応することは容易に理解できる。その次の「従識窟中出」については、他の経疏に次のような用例を見出せる。

成論師云。衆生従無明識窟中流来。為仏所愛念故名為子。（吉蔵『法華義疏』、大正蔵三四巻、五三九b）

五者成実大乗義云。従無明識窟流来入三界。初起一念善因為来。（吉蔵『中観論疏』、大正蔵四二巻、五四a）

これらの資料からも、衆生とは無明の識窟から流来するものであると認識していたのが、成論師であったことが窺え、金治氏の成論師説を裏付ける。

【資料4】LM20_1465_06_05（選影七五頁）

1　与煩悩惑得此身。因既是虚。果〔□□〕〔

2　偽是多。是以偏増虚偽衆生。不思議變[易]〔

3　〔　　〕意慮相傳受變易生。[然]〔

4　〔　　〕解言。其實不〔

敦煌本（三四三～三四八行）

第二。出二種生死。又分為二。　第一。出名。従何等為二已下是。　第二。出體。従分段死者已下是。虚偽衆生者。謂煩悩顚倒。受三界生。及有聖人。聖人少。故偏言虚偽衆生也。謂阿羅漢者。今釋二乗七地。並未免色形。生二國中間。未受變易生死。八地已上。无復形色。但意慮相傳。以

明易闇。是變易生也。

【資料5】（図1）

□□□□□□具脩万行登於」〔八地

聖人受變易生。實是八地菩薩。依良主〔

〔受變易生此□□□為断」四住煩悩。撿分段〔生」〔

〕〔變易生」者當為空中。諸〔菩薩」〔

〕若是意〔□為」〔



図1　LM20_1465_07_03

【資料6】LM20_1465_06_04（選影七六頁）

1　易生。乃至究竟无上菩提。仏果。无上菩〔提」〔

2　變易〔□不□。金剛」終心。學中之上。名為无上〔

敦煌本（三四八～三五二行）

今言二乘受變易生死者。以昔是二乘。轉為菩薩。於七地中。具修万行。登於八地。受變易生。仍昔本名。言二乘之人。受變易生。實是八地也。究竟无上菩提者。言仏果。乃免變易生也。又釋云。金剛心。名爲學仏。亦名无上菩提。乃至金剛心。不免變易生。

【資料7】LM20_1465_06_07（選影七六頁）

1　〔死」。那得越段。結二種死中。二乘断一。故如来昔〔与」〔

2　〔□」第一。結如来昔与。第二。従非盡已下結勝鬘今奪。〔就」〔

3　〔　　結盡〕〔智。〕第二。従得有餘已下。結〔

敦煌本（三五二～三五五行）

第三結与奪。結第一段也。所以不結第二段者。以第三段。本釋第二段。又相去近。結義可知。第一。以遠故須結。又分爲二。第一。結仏昔与。又分爲四。第一。結盡智。従二種死中已下是。　第二。結梵行已立智。従得有餘果已下是。

筆跡に乱れがあるが、断片の形などから判断して、同一手と考えてよい。最初の1～2行目は、奈九三と十全に一致しないが、同じ趣旨のことを説明していると思われる。1行目「那んぞ段を越えるを得んや」とは、「第三に与と奪とを結んで第一段を結ぶなり。第二段を結ばざる所以は、第三段を以て本の第二段を釈せり」とあるのに対応する。また後述するように、トゥク本の科段の進行の特徴から推測すると、2行目から3行目の欠落部分には、「第一に仏昔与えたまうを結ぶ」ことについて、さらに四つに分かった「第一に盡智を結ぶ」ことが述べられていると考えられる。

【資料8】LM20_1465_07_04（選影七六頁）

1　〔切煩悩〕者。但三界内煩悩。非盡三界外煩悩。所以〔非〕〔盡

2　〔　　〕〔故説〕不受後有者。但〔□〕〔

敦煌本（三五五～三五九行）

第三。結所作已辨智。従凡夫人天已下是。　第四。結不受後有智。従阿羅漢已下是。略不結涅槃果。　第二。結勝鬘今奪。又分爲二。　第一。結奪盡智。従非盡一切〔已下〕是。　第二。結奪不受後有智。従亦非盡一切已下是。由梵行已立。故煩悩盡。梵行已立。

1行目「[切煩悩]者」は経文「非盡一切煩悩」（大正蔵一二巻、二一九c28）。2行目「故説不受後有者」は経文と同文（大正蔵一二巻、二一九c29）である。順序から言えば、「第二に不受後有智を奪うを結ぶ」段にあたると考えられる。それ故ここに配置したものの、確定的とは言えない。

【資料9】LM20_1465_06_06（選影七六頁）

1 〔我生已盡〕智中由所作已辨。故不受後有[所作已]〔辨
2 [但]結奪二智。則苞於四智。四智既不究竟。涅槃〔
3 〕[向]記説。擧二種煩悩。釋〔
4 〕[煩悩]必致生死。[二乗]〔
5 除之累。理招變易。故生死有二。亦得釋上〔
6 [所]不能。所以非是究竟。仏能永除。所以究竟。亦得[釋]〔
7 〔 □〕[故]如来昔与。就中凡[有三]〔
8 〔 煩〕[悩]有二種已下〔

敦煌本（三五九～三六七行）

智入盡智中攝。由所作已辨。故不受後有。所作已辨智。入不受後有智攝。但結奪二智。則苞於四智。四智既不究竟。涅槃理自不備也。第四。擧二種煩悩。以釋第三生死有二種也。釋云。夫生死必因煩悩。煩悩必致生死。二乗已断之惑。既感分段。未除之累。理招變易。所以生有二也。亦即釋第二段。既有煩悩。二乗所不能断。故四智未備。仏能永除。所以究竟。亦即釋第一段。二乗断一。故仏昔与。未断其二。故勝鬘今奪。又分爲三。第一。直擧二種煩悩。以釋於前。從何以故有煩悩已下是。

科段に関する部分であり、敦煌本ともよく一致している。2行目までは第三に二種生死を挙げる段の最末枝の「結奪不受後有智」までを、4行

目以降は第四に二種煩悩を挙げ、さらに三つに分科した第一「直挙二種煩悩」までを標挙する箇所に該当する。

【資料10】LM20_1465_07_05（選影七六頁）

1 [□□□□□□□□]〔
2 [第]〕三。従世尊阿羅漢辟支仏最後身[菩]
3 〔□[第]一。一住。]擧一種煩悩。以釋於前。第二。従煩[悩□]〔
4 〕[第一。従]初已下。訖无始[无]〔
5 〕[□□□]〔 〕訖[如]是世尊[无]〔明住地
6 用勝負。第三。従又如取縁已下。訖縁无[明住地]〔
7 〕[住地已下。訖]即是无明住地。明下[断]〔
8 〕[□]或為章門。第二。[従]〔
……紙縫……
9 [□□心]不相應[已下。釋]第二或。今言。煩悩〔
10 地煩悩為第二種。第二。従何等為二已下[釋為章門]〔
11 〕[□□]章門。在前謂住地煩悩。此牒□〔
12 〕[門]。第三。従住〔

【資料11】LM20_1455_26_04（選影七七頁）

1 従世尊心不相應已下。釋〔
2 [无明]住地。亦應更別作章門。出无明〔

3

」〔住地體。亦應更有一句。釋〕〔

資料10は、トユク本が、どのような科段の進行方法を取っていたかを理解する上で重要な資料であるので、詳しく説明したい。まず敦煌本との対応箇所を示すが、前後しているため、まとめて提示することはできない。煩雑ではあるが、順を追って示すことにしたい。

2行目「第三。従世尊阿羅漢辟支仏最後身菩」

（敦煌本）第三。結。結前第二段。唯如來究竟。二乘不究竟也。所以不結第一段者。前第三段。以結不重結也。以第四段。本釋第三段。又相去近。結義可知。又不結也。第二段相去以遠。又未逕結。故今結之也。又分爲四。　第一。結二乘不究竟。凡明七徳不備。即分爲七。　第一。明智恵不備是色。從従世尊阿羅漢已下是。（四一一～四一六行）

3行目「第一。一住。擧一種煩悩。以釋於前。」

（敦煌本）第一。直擧二種煩悩。以釋於前。從何以故有煩悩已下是。（三六六～三六七行）

3行目「第二。従煩悩」

（敦煌本）第二。出煩悩體相。又分爲四。第一。正明二種煩悩體相。又分爲三。第一。開二惑章門。煩悩有二種。此句是也。（三六七～三六九行）

4行目「第一。従初已下。訖无始无明住地」

（敦煌本）第一。正明二種煩悩體相。（三六八行）

5行目～6行目「訖如是世尊无明住地……用勝負。」

（敦煌本）第二。格量煩悩。力用勝負。（三七六行）

6行目「第三。従又如取縁已下。訖縁无明住地」

（敦煌本）第三。明潤業不同。又分爲四。　第一。明潤有漏業。而生三有。從有如取縁已下是。（三九〇～三九一行）

7行目「住地已下。訖即是无明住地。明下断」

（敦煌本）第四。明断義。又分爲四。（四〇二行）

8行目「□□或為章門。」

（敦煌）第一。開二惑章門。煩悩有二種。此句是也。（三六九行）

8行目～9行目「第二。従……□□心不相應已下。釋第二或。今言。煩悩」

（敦煌本）第三。出无明住地。此即釋二惑章門之第二惑也。従従世尊心不相應已下是。（三七五行）

10行目「第二。従何等為二已下釋為章門」　※「第二」は「第一」の誤写か？

（敦煌本）第一。列四住地章門。何等爲二。謂住地煩悩。此句是也。（三七〇行）

11行目「章門。在前謂住地煩悩。此牒」

（敦煌本）第二。列起煩悩章門。煩悩。此句是也。（三七一～三七二行）

敦煌本には見えない説明あり。

12行目「第三。従住」

（敦煌本）第三。釋住地章門。従住地有四已下是。（三七二行）

両疏の科段分文の位置は、ほぼ同じであることが確認できるものの、科段の進行に大きな違いがある。引用した敦煌本の文言が、トユク本の順序と一致しないのもそのためである。敦煌本の科段は、「章のはじめに、その章を幾つかの段落に分けると述べ、直ちに第一の段落をさらに幾つかに分け、その第一をまた幾つかに分けるといって説明を進める。だから、すぐ後の「第二」とあるのは、最末端の段落であることは容易に理解できるとしても、その後に中段落の「第二」の見出しが来たとき、読者は少し戸惑うこともある。大段落の「第二」「第三」の見出しは数十行も離れて現われる方法[15]を取っている。これに対しトユク本は、一つの章を幾つかの大段落に分ける際、まずその区切り場所を示し、且つ一つ一つの段落について説明し、はじめに戻って、第一の大段落をさらに幾つかの中段落に分ける区切りと段落ごとの意味づけを行い、その第一の段落をさらに分ける場合には、同じ手続きを踏んではじめに戻って内容の説明に入っていく方法が取られていたものと推察される。つまり資料10は、段落に分ける区切りと意味づけをする部分に該当しているわけである。この方法によれば、資料11は、資料10の8行～9行目に第二の惑を釈す段に

再び立ち戻って説明した箇所と解しうる。また資料10の10行目に「第二」とあるが、ここは敦煌本に従えば、第一の四住地章門を列するところでなければならないが、「第二」となっている以上、科段分文に相違があったか、もしくは単なる誤写であった可能性も拭い切れない。以上を図示すると科段表（表一）のようになる。表一は敦煌本の科段表であるが、トゥク本もこれに近い科段であったとの想定のもとに作成したものである。

さらに注意すべきは、この方法が、太子本と共通している点である。資料10は、敦煌本よりもむしろ太子本の方が、よく対応していると思われるので、以下に引用しておきたい。

第二従煩悩有二種以下。出煩悩體相。標疑云。何以如来能除二死。二乗未除耶。釈曰。煩悩有二種。一四住地煩悩。二無明住地煩悩。如来已尽二種煩悩故。二死兼除。二乗唯尽四住地煩悩故。但除分段生死。就第二出煩悩體相。又分四。第一正出二種煩悩體相。第二従此四住地力一切上煩悩以下。格量二種煩悩功用勝負。第三従又如取縁以下。明其潤業不同。第四従世尊如是有愛住地以下。明段除之義。就第一正出體相中。又有二。第一釈四住地惑。第二従世尊心不相應以下。釈無明住地惑。(16)

藤枝氏が、敦煌本と太子本にみられる両様の科段進行方法のうち、想定される「本義」はどちらの方法であったか、実証不可能であるとしながらも、後者の方法ではなかったか、と提言されていることは注目されてよい。(17)つまり太子が『勝鬘経義疏』を撰述するにあたって採用した科段の進行方法にモデルが存在した可能性を、このトゥク本が示唆していると思われるからである。

【資料12】LM20_1458_26_04（選影七七頁）

1　　」□□〔

2　　」□[行]三心。識名増上王。四心之初。[受]〔

3　　」□[識中有]微執。相中有微過。受中[□]〔

4　　」[悩]任運而〔

敦煌本（三七二～三七五行）

第四。釋起煩惱章門。從此四住地已下是。刹那心者。識心也。刹那相應者。想受等心也。　第三。出无明住地。此即釋二惑章門之第二惑也。從世尊心不相應已下是。根本枝條。並无四心相應也。

ちなみに太子本では、

第二從世尊。心不相應以下、釋無明住地惑。刹那心者、謂受想行等。心不相應者、根本並無四心相應。無始者、無始於已。(18)

とある。資料12は、おそらく「世尊。心不相應無始無明住地」（大正蔵一二巻、二二〇a）を説明するものと推測される。敦煌本では、資料11の直後にこの箇所の説明がくることから、仮にここに配置しておく。

【資料13】LM20_1465_08_01（選影七七頁）

1　〔　　〕[地煩惱為]〔
2　謂見一處者。從或作名。衆生起或以[我□]〔
3　〔　〕[□]則一時或来。同感一處果報。故束[為]〔
4　〕[□□起]皆由著我。是故[於]〔
5　〕之治道作〔

【資料14】LM20_1520_28_12（選影七七頁）

1　□无始[□]〔
2　有即不[了]前[□]名作无明。能生於[後]〔
3　〕但〔　〕[□]識念念下隧。无有[相]〔

……紙縫……

4　　」[在]於初更无[始]〔

【資料15】LM20_1465_07_02（選影七七頁）

1　[知以我□]為頭。故[為□□不尒。行]〔

2　[相]續断。見諦或盡。道成須陀恒果。見諦断。故名〔

3　　」□[□]愛欲障過作名愛。有多[能]〔

4　　」作名无色界。亦[應]〔

【資料16】LM20_1465_06_01（選影七七頁）

1　　」

2　」[□]解言。欲破外人所計外[人多□]〔

3　」□有愛在那得是卞涅槃。若尒。外人□〔

4　　」[計多不二]界計少。従[多]〔

資料13、14、15、16の相対的な前後関係は不明であるが、四住地煩悩に関する用語を拾うことができる。四住地煩悩とは、「見一處住地」、「欲愛住地」、「色愛住地」、「有愛住地」である。科段表でいえば、煩悩を格量する中の「明四住地力劣」以下に該当すると推測し、ここに配置した。

【資料17】『西域考古図譜』下巻「仏典附録一ノ五」（図2）

1 无明住地生建立増長。合上皆依地生建〔
2 壊者。過恒沙已下訖皆亦隨断。合上〔□〕〔
3 訖不受後有。明下得因果。初明得因〔□□〕〔
4 一切知見。明下得智。離一切過悪。明下〔□□〕〔
5 法中自在故。釋法王。作一章門。法主者〔□□〕〔
6 而得自在。登一切法自在之地。釋上〔法□□〕〔
7 故釋法。従如来應等正覺正師子吼訖〔□〕〔
8 法主。我生已盡。梵行已立。所作已辦。不受〔後有〕〔
9 満足。是故已下。明下結正是如来四智究〔竟〕〔
10 子吼。勝鬘自説。所説无畏。依於了義〔
11 勝鬘義記巻中
12 延昌廿七年□〔

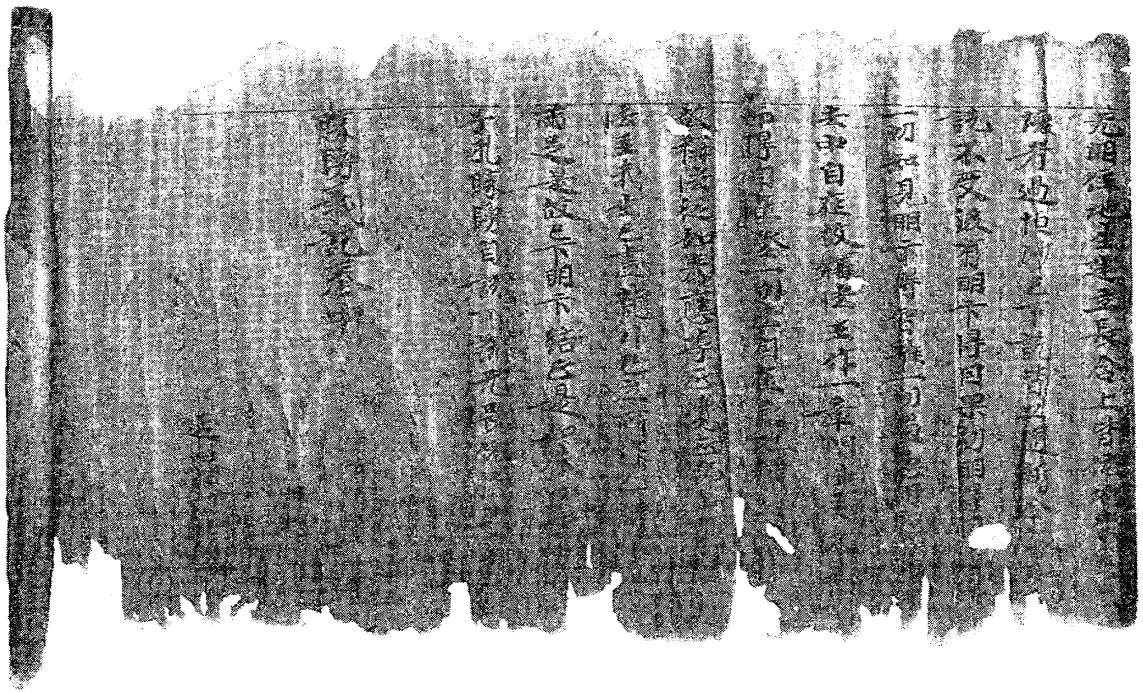


図2　『西域考古図譜』下巻

敦煌本（四七六～四八四行）

先合種子譬。從如是過恒沙已下是。次合地譬。從一切皆依已下是。次合地壞譬。從若无明已下是。次明合後亦随壞譬。從過恒沙已下是。第三雙。雙明得因果也。正明得因滿。所以果滿也。初明得因中智斷。先明得智。從如是一切已下是。次明得斷。從離一切過已下是。後明得果。現衆徳。法王法主。即爲二章門。次釋法王章門。從而得自在已下是。次釋法主章門。從如來應等正覺已下是。我生已盡者。法主自説。四智究竟也。第四。後一結也。從是故世尊已下是。以師子吼者。勝鬘自言所説。得理无畏也。依於了義者。説仏是究竟也。一向記説者。无復二言也。

資料16から17の間には敦煌本にして約百行分の欠落がある。断片の残存状況としては、少し不可解である。本来は相当数の断片があったはずであるが、残念ながら旅順博物館から、これら以外にそれらしい断片は見つかっていない。あるいは資料17と旅順博物館の資料は別のものであると考える向きもあるかもしれない。しかし、字すがたや内容からみても同じ写本の一部であることに疑問の余地はない。

敦煌本は、先に意味づけを述べて、「従～已下是也」という定型句で該当する経文を提示するのに対して、資料17は先に「従～訖～」あるいは「～已下訖～」という定型句で経文を示し、その直後に意味づけを行なっている。そのため対応が判りにくくはなっているが、その実全く同じ随文解釈となっている。

以下「一乗章」はまだ続くのだが、トユク本は、ここで巻中を終えている。おそらく調巻の都合によるもので、何か内容上に特別の意味合いを持たせたものと考えるべきではないだろう。

四、むすびにかえて

以上、トユク本と敦煌本とを対比し、その異同を中心にみてきた。その結果トユク本が、敦煌本や太子本と同じ学系に属することが明らかになった。その学系とは、吉蔵によって「成論師」と呼ばれた一派である。さらに、科段の進行方法において、敦煌本とは大きな相違があるものの、太子本とは同じ方法であることを確認した。ところで敦煌写本には、「奈九三」とは別に同一文献である「玉二四（ＢＤ一一三）があり、

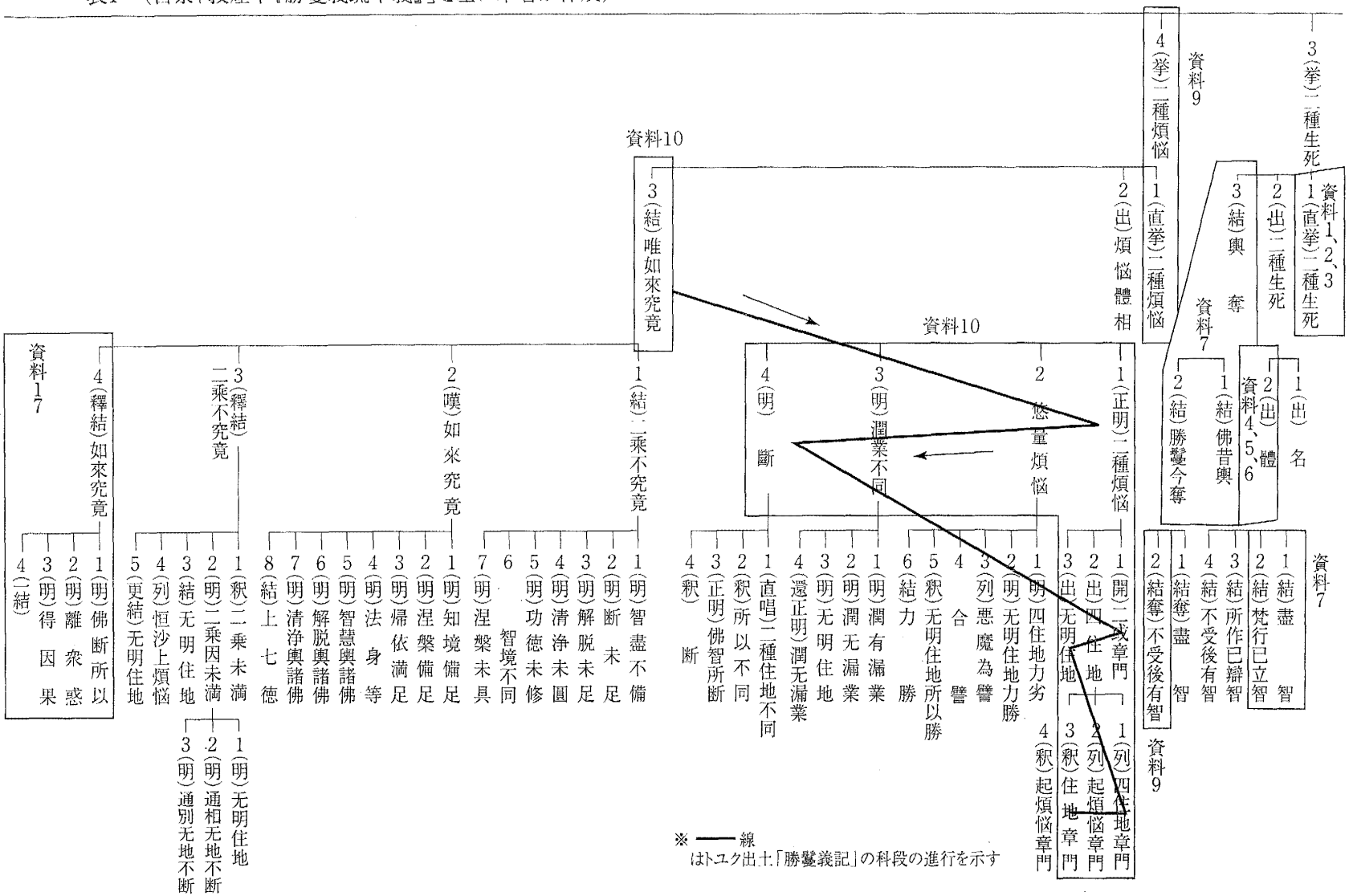
さらにトルファンからは7断片、少なくとも2種類以上の存在が確認されている。[19] したがって敦煌本とトユク本のどちらがより影響力をもっていたかといえば、やはり敦煌本であったと思われる。

では、冒頭で提起した「本義」問題のなかで、トユク本は、どこに位置づけることができるだろうか。端的にいえば、藤枝氏が想定した敦煌本と太子本が依拠した共通の祖形たる「本義」に本資料があたるかどうか、ということに集約されるのだが、ごくわずかな資料から判断することは、もとより針の穴より天を窺うようなものであり、現段階でそれに対する明確な回答を出すことは不可能である。ただし本資料の存在自体が、同じ学系のなかで一つの経典に対していくつもの注釈書が生み出されていったことを強く示唆しており、その意味で藤枝氏の想定は否定されるものではない。

もしトユク本が藤枝氏のいう祖形であるとするならば、全ての問題は、氷解することになる。またそうでないとすると、つまり金治氏がいうように敦煌本が「本義」そのものであったとすると、私たちは、敦煌本と太子の疏の間に科段の進行方法上の看過することのできない差異を説明しなければならなくなる。その差異を埋める資料となるのが、トユク本となるはずである。つまり、聖徳太子は敦煌本を「本義」として依拠しつつ、別に同じ学系のトユク本のような疏も参照しつつ、科段の進行方法についてはむしろこちらを採用したとも考えられる。しかし現時点で結論を出すことは保留しておきたい。

本資料はトユクから出土した麹氏高昌国時代のトルファン地域の仏教事情を反映するものである。本資料以外にも様々な注釈書が書写され学ばれていたことが、出土資料から確認されている。トルファン出身の僧慧崇は、北魏に留学して毘曇、成實を学んだ。学成った後も国王から帰国の要請があった際にも、「私が到達した仏教に対する博い理解は、田舎で役に立つものではない」といって、帰国することを固辞しつづけた。[20] 従来この事例が、高昌国における仏教の水準の低さを示す証左としてとらえられることがしばしばあったが、出土資料は、水準が低いという一言では説明のつかない状況を物語っているように思われる。すなわちトルファンが中原、江南で行われていた当時の最新の仏教教理を積極的に吸収しようとした姿勢が浮かび上がってくるのである。

表1　（古泉「敦煌本『勝鬘義疏本義』」を基に筆者が作成）



註

（1）藤枝晃「北朝における『勝鬘経』の伝承」、『聖徳太子と飛鳥仏教』（日本宗教史論集第一巻）、吉川弘文館、一九八五年、二四〇頁

（2）藤枝前掲論文では高昌国の五六四年にあてる。

（3）『卍新纂　大日本続蔵経』第十九巻、№三五一、八七五b1～八七六a12。浄影寺慧遠の『勝鬘義記』は、上巻が『大日本続経』に収められるので、下巻に敦煌写本P二〇九一およびP三三〇八が確認されている。

（4）14例のうち1例は「又云」として「奈九三」と一致する文章が引用される。金治勇「勝鬘経義疏の「本義」について」、『聖徳太子研究』第七号、一九七三年

（5）古泉圓順「敦煌本『勝鬘義疏本義』」、『聖徳太子研究』第五号、一九七〇年

（6）藤枝晃「解説　勝鬘経義疏」、『日本思想体系2　聖徳太子集』、岩波書店、一九七五年

（7）金治勇前掲論文

（8）金治勇「勝鬘経義疏の「本義」の学系と撰述者」、『四天王寺女子大学紀要』第三号、一九七〇年

（9）香川默識（編）『西域考古図譜』下巻、国華社、一九一五年

（10）P.Pelliot, *Les routes de la région de Turfan sous les T'ang*, édités Jean-Pierre Drège, Paris, 2002, p.10

（11）二〇〇七年七月十四日～八月二十六日にかけて青森県立美術館で『旅順博物館展　西域仏教文化の精華』が開催され、共同研究の成果の一部が一般公開された。なお二〇〇七年度より日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金の交付を得て、共同研究「旅順博物館所蔵仏教写本の学際的研究」（研究代表者　三谷真澄）が進行中である。

（12）薩枝晃前掲論文および金治勇「敦煌本勝鬘経疏（奈九三）と勝鬘経義疏との比較―主として文章科段について―」、『印度仏教学研究』第一八巻第二号、一九七〇年などを参照

（13）旅順博物館・龍谷大学（共編）『旅順博館物蔵　新疆出土漢文仏典選影』、法蔵館、二〇〇六年、七五～七七頁

（14）注（8）参照

（15）藤枝晃「解説　勝鬘経義疏」、『日本思想体系2　聖徳太子集』、岩波書店、一九七五年、五〇三頁

（16）『四天王寺會本　勝鬘経義疏』四天王寺、一九七一年、八五～八六頁

（17）藤枝前掲論文　五〇四頁

（18）『四天王寺會本　勝鬘経義疏』四天王寺、一九七一年、八六頁

（19）橘堂晃一「旅順博物館蔵麴氏高昌国時代の仏典注釈書概観」、『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典研究論文集』、龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会、二〇〇六年

（20）「以吾博達義。非辺鄙之所資也」（『続高僧伝』巻七、大正蔵五〇巻、四三八a）

（21）羽溪了諦『西域之仏教』、法林館、一九一四年および姚崇新「試論高昌的仏教与仏教教団」、『敦煌吐魯番研究』第四巻、北京大学出版、一九九九年などがある。